

「佛」墨書土器の出土状況

—印西市南西ケ作遺跡出土遺物の紹介を兼ねて—

糸川道行

1. はじめに

印西市多々羅田に所在する南西ケ作遺跡^{みみにしがさく}は奈良・平安時代の集落を主体とする遺跡である。

南西ケ作遺跡の発掘調査は、千葉ニュータウン開発事業に伴って2度実施された。最初は昭和48（1973）年度で、報告書も刊行されている¹⁾。その後20年が経過して、平成5（1993）年から平成6（1994）年にかけて再度、発掘調査が行われた。

1994年の調査時に、1棟の竪穴建物から興味深い土器が出土した。その土器の側面には「佛」という墨書が書かれ、さらに底部外面には花模様の絵が描かれていた。この花模様は「佛」との関わりから蓮の花と考えることが妥当であろう。

調査者をはじめ、当時から一部で注目されていた遺物であったが、筆者はその後特に関わることもなく、年月が経過した。しかし、当センターの平成14年カレンダーに取り上げられ、コメントを書いたことから、再度この土器に関心をもつようになった。

2回目の調査からすでに8～9年経過し、正式な報告もかなり先になる見通しということもあって、今回資料紹介を行うこととした。多方面に広く活用していただければ幸いである。

さらに「佛」墨書土器について千葉県内の事例の集成を行い、これらの土器群に対して考古学的にどのような評価ができるのか特に出土状況の面から検討してみたい。なお、この場合の墨書土器には線刻資料も含めることとする。また、「佛」墨書土器とした場合に「仏」を含める場合があることを断っておきたい。

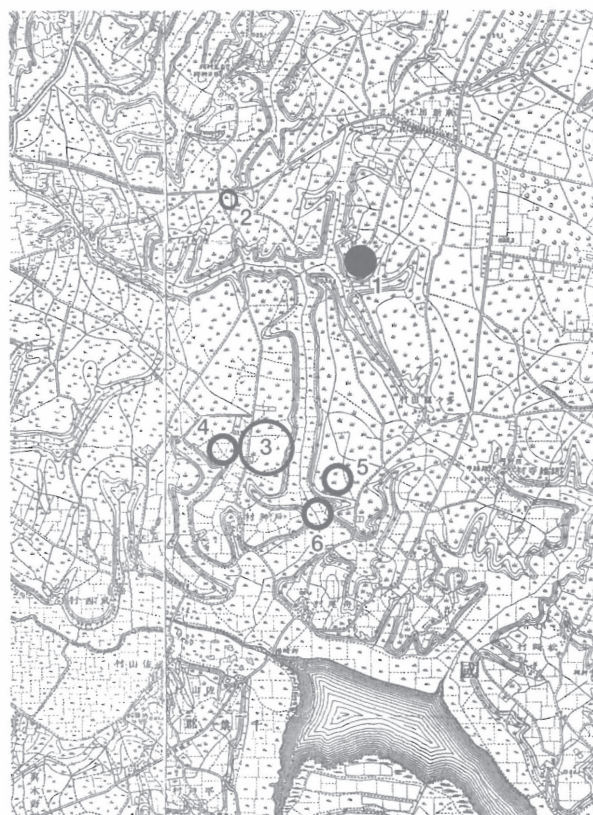
2. 南西ケ作遺跡周辺の奈良・平安時代遺跡

近現代の開発事業のため、地域によっては元々の地形がかなり変貌している場合がある。南西ケ作遺跡周辺もそのような地域の一つである。そこで、本稿では明治年に日本陸軍が作成した地形図である迅速図に遺跡の位置を記入してみた（第1図）。

現在、印旛沼は治水事業により面積がかなり減少したが、迅速図ではまだかなり広がっていたことがわかる。沼の西端部を取り込んだ地図を掲載したが、この沼端部には西や北方から神崎川が、南方から新川（旧平戸川）が注いでいる。神崎川には沼の端部近くで、北方から戸神川が注いでいる。

戸神川が流れる低地部のうち、印旛沼からおよそ1kmのところには西根遺跡（6）がある²⁾。西根遺跡上層からは奈良・平安時代の遺物が出土し、その中には長文墨書土器等注目すべき内容のものもあり、集落の祭祀を考える上で大きな成果が期待できる³⁾。

西根遺跡の西側台地には鳴神山遺跡（3）・白井谷奥



第1図 南西ケ作遺跡と周辺の遺跡の位置（1/50,000）

- 1 南西ケ作遺跡 2 大塚前遺跡 3 鳴神山遺跡
4 白井谷奥遺跡 5 船尾白幡遺跡 6 西根遺跡

遺跡(4)が⁴⁾、東側台地には船尾白幡遺跡(5)がある⁵⁾。鳴神山遺跡からは奈良・平安時代の竪穴建物が202棟見つかり、遺物も紀年銘等の長文墨書土器が報告されている。船尾白幡遺跡からは奈良・平安時代の竪穴建物が75棟見つかったが、台地全域の調査ではないので、棟数の大幅な増加が見込まれる。西根遺跡の調査地点は船尾白幡遺跡に近く、また鳴神山遺跡からも西根遺跡の所在する谷部に降りていく道路跡が見つかっている。関連するであろう居住域と生産地域が調査された稀有な事例として注目される。

西根遺跡の所在する谷はまっすぐ北方に延びていくが、途中で東西にも分岐する。南西ケ作遺跡は東方に分岐する谷の付け根際の台地にある。遺跡から見ると、谷は南側及び西側となる。西根遺跡からおよそ2kmの地点である。台地北方は手賀沼からの谷津が延びてきているが、印旛沼水系の遺跡と考えて良いだろう。印旛沼からの距離はおよそ3kmである。

奈良・平安時代の寺跡である大塚前遺跡は、南西ケ作遺跡からみて谷をはさんだ西方台地に所在する⁶⁾。直線距離にして1kmである。鳴神山遺跡からみた場合は谷をひとつはさんだ北方の台地である。出土した瓦が下総国分寺と同範であり、遺構の状況とともに注目された遺跡である。見つかった遺構は並んで建てた2棟の掘立柱建物及び1棟の竪穴建物である。掘立柱建物の1棟は薨棟といわれる屋根の頂上部分にのみ瓦を有する四面庇の建物である。仏像を安置した本堂と想定されている。もう1棟は付属的な建物で、僧坊であろう。竪穴建物の平面プランは横長の長方形で、僧侶の住まい及び台所機能をもつ建物であろう。建物北側の溝状遺構は道路跡と推定されている。大塚前遺跡は国分寺僧の修行道場の施設であるが、仏教の普及という点で近在集落に影響を及ぼしたものと考えられる⁷⁾。

以上、南西ケ作遺跡のごく近在の奈良・平安時代遺跡をみてきた。これらは古代印旛郡船穂郷に所在する遺跡と思われる。最近では松崎工業団地造成事業に伴う印西市松崎遺跡群の調査により、ここで取り上げた遺跡群の東方地域の様相も明らかになりつつある⁸⁾。また印旛沼の南側、対岸の地域は印旛郡村神郷の北部にあたる地域であるが、八千代市上谷遺跡・向境遺跡等の調査により、様相が明らかになってきている⁹⁾。両岸には津の存在も予測される¹⁰⁾。今後は船穂郷内の各集落の比較や村神郷など周辺郷に所在する集落との交流も検討課題となろう。

3. 南西ケ作遺跡の「佛」墨書・蓮花墨画土器

南西ケ作遺跡は印西市多々羅田字南西ケ作172ほか
に所在する。昭和48年度の調査対象面積は4,800㎡で、奈良・平安時代の遺構は報告されていない。平成5年度から6年度にかけての調査では、対象面積が13,489㎡、上層本調査面積が9,939㎡である。奈良・平安時代の竪穴建物は19棟である。掘立柱建物ははっきりとは見つからなかったが、多数見つかった土坑の中には掘立柱建物となるものがあるかもしれない。その他、縄文時代の陥穴・炉穴、中世の土坑墓が少数見つかっている¹¹⁾。

奈良・平安時代の竪穴建物は南方の谷を臨む台地縁辺部にやや多く、中央部に向かって散在的になっていく。対象範囲では西方の谷を臨む縁辺には少なく、調査地北側の西寄り縁辺に1棟存在するが、別のグループを形成するものと思われる。

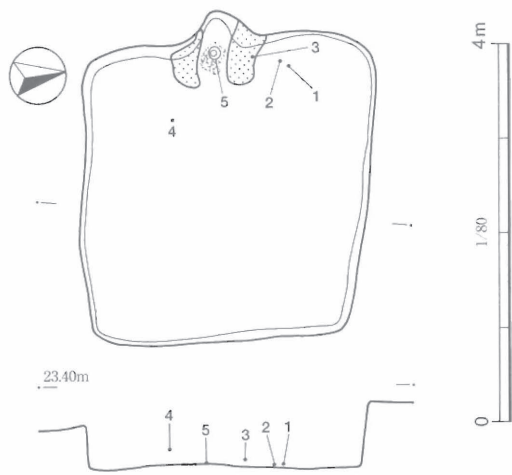
「佛」墨書土器・蓮花墨画土器(以下蓮花墨画は省略)が出土した036竪穴建物は台地南縁辺やや西寄りに位置し、最も分布の濃い場所に位置する。ただし、時期的な細分は今後の検討事項であり、同時期の竪穴建物の抽出はできていない。

036の平面形はやや不整な方形である(第2図)。カマドと対向する壁中央を結ぶラインを主軸方向とすると、わずかに主軸方向に長い方形である。規模を壁上端中央で計ると、主軸が3.2m(カマドの突出部を除く)、直交するラインが3.1mである。確認面から床面までの深さは50~70cmである。カマドは西壁中央に位置する。周囲の竪穴建物は北カマドであり、全体的には北カマドが多いが、いくつか西カマドの竪穴建物が存在する。出入口口ピットや柱穴は見つからなかった。

「佛」墨書土器はカマドに向かって右側の、床面からわずかに高い位置で、伏せた状態で出土した(第2図1・写真1)。床面からわずかに高い位置とはいえ完形品であり、出土状況からも原位置を保ったまま、すなわち遺棄されたままの状況と思われる。

「佛」墨書土器の近くからは2点の土師器杯が出土した。(第2図2・3)。これらは底部を下にした通常の状態での出土である。2は遺存が良く、床面に近い位置での出土なので、「佛」墨書土器とセットになる可能性も考えられる。3も1・2よりもやや高い位置ではあるが、遺存が良く、1・2とセットとなることも考えられよう。

そのほか、遺存の良い遺物として、カマドの前や左の覆土から土師器杯4が出土し、カマド内からは支脚



第2図 036

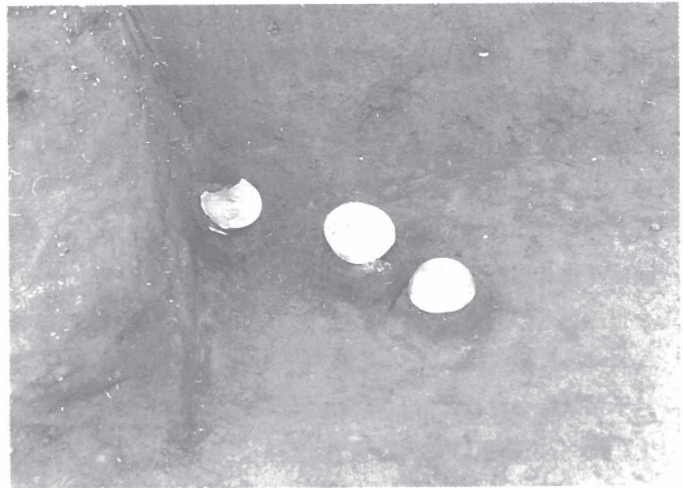
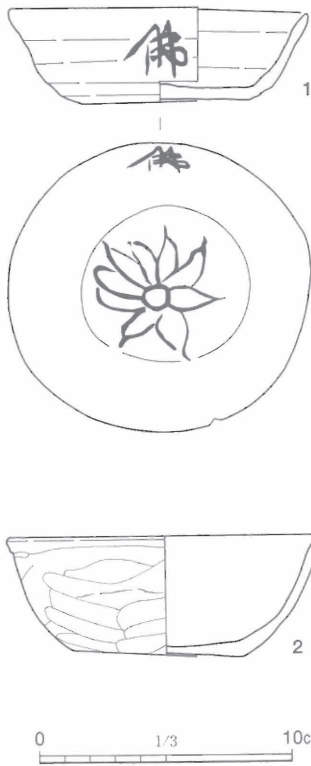


写真1 036遺物出土状況



第3図 036出土土器

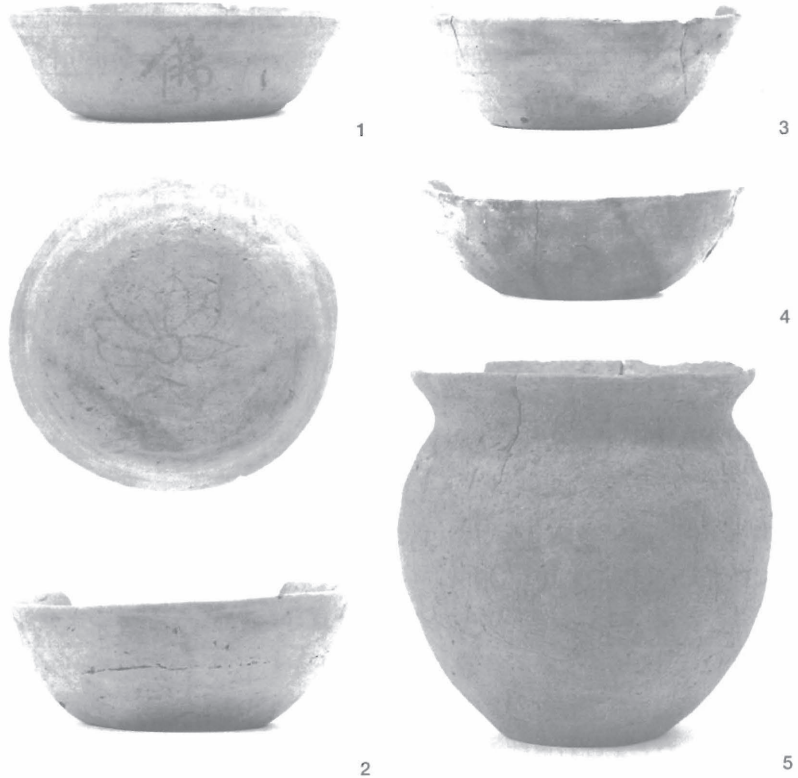


写真2 036出土土器

に転用された土師器小型甕5が出土した。

「佛」墨書土器については実測図及び写真を掲載した(第3図1・写真2の1)。ロクロ土師器杯の口縁・体部外面中央に正位で「佛」と書かれ、底部外面にはほぼいっぱい花模様様が描かれている。口縁部径は11.5~12.1cm, 底部径は6.2~6.6cm, 器高は3.3~3.9cmである。器表面が荒れており、やや変色した部分もあることから、二次的な火熱を受けたものと思われる。土師器杯2も実測図と写真を掲載した(第3図2・写真2の2)。非ロクロの土器で、外面は手持ちヘラケズリが施され

ている。口縁部径は12.4cm, 底部径は6.3~6.8cm, 器高は4.3~5.0cmである。

3・4・5は写真のみ掲載した(写真2の3・4・5)。3はロクロ土師器杯で、大きさは口縁部径が11.5cm, 底部径が6.8~7.1cm, 器高が3.9~4.2cmである。4は非ロクロの土師器杯で、大きさは口縁部径が11.6cm, 底部径が5.6~6.1cm, 器高が3.6~4.0cmである。3は底部内面に黒色物が付着し、4も口縁部内外面に油煙による煤が付着していることから、ともに灯明器として使用されたのであろう。

5は土師器小型甕で、火熱による赤色化が著しい。口縁部径は12.1cm,底部径は6.0cm,器高は13.4cmである。

以上、「佛」墨書土器を含め、遺存の良い土器について、出土状況図や実測図・写真を掲載した。もちろん036の遺物はこれだけではなく、今後の整理作業によって新たな知見が付け加えられることはいうまでもない。今回は「佛」墨書土器の資料紹介を主として、中間報告を行ったものである。

4. 千葉県における「佛」墨書土器の事例

(1) 「佛」墨書土器集成の概観

南西ヶ作遺跡の「佛」墨書土器について気になったことは、その出土状況である。カマド右脇のほぼ床面に近い位置に伏せた状態で出土した状況が、意図的であるように思われた。そこで、「佛」墨書土器について特に出土状況の面から千葉県内を主として他遺跡の事例を調べてみることにした。

千葉県内の資料については集成表を作成したが、この表について若干の説明をしたい。「佛」墨書土器中心の表であるが、同一個体で「佛」・「仏」以外の文字がある場合、その釈文も掲載した。また、「佛」・「仏」が書かれていなくても、「佛」・「仏」墨書土器と重なって出土するなど明らかにセット関係にある墨書土器についても掲載した。また「佛」は書かれていないが、佐倉市江原台遺跡出土の花模様のある墨画土器も南西ヶ作遺跡との対比上、表に掲載した。

出土状況の欄で、「起」の記述は底部を下にして出土した状況を、「伏」は伏せた状況、「横」はそのどちらでもない状況を表す。竪穴建物内の位置はおおよその位置を記述したものである。基本的にカマドが壁中央、出入り口部がカマドに対向する壁中央際にあるものとみなすと、たとえば右奥はカマドに向かって右側のスペース、前中央は出入り口部付近となる。

まずはこの集成表を概観してみる。千葉県内出土墨書土器に「佛」が記された事例は推測されるものも含めて、55例ある。「佛」一文字のものが多く、2文字以上のものでは「佛佛」、「佛坏」、「千仏」、「門佛」、「盛佛」、「仏工舎」、「佛酒」、「四佛」などがある。略字の「仏」は非常に少なく、本埜村角田台遺跡の「千仏」、成東町真行寺廃寺の「仏工舎」だけである。「仏工舎」は鍛冶工房出土で、工房建物に関わる墨書と理解され、他とはかなり性格の異なる資料である。

器種は土師器坏・高台付坏・高台付皿・蓋・甕・仏鉢形土器、須恵器坏・蓋があるが、土師器坏が多数を

占める。

出土遺跡として、市川市下総国分寺や国分尼寺、市原市上総国分尼寺、成東町真行寺廃寺などの本格的寺院跡を含む遺跡があるのは、ごく自然な状況と理解される。しかし、県内においてより多数を占めるのは集落遺跡からの出土資料である。また、必ずしも拠点的な集落ばかりというわけではない。

事例がそれほど多くないことから、地域的な分布について断定的に述べることは危険であるが、印旛から香取にかけて多く出土する傾向がうかがえる。これは千葉県内における墨書土器そのものの量的な傾向と同様である。

年代は8世紀第3四半期頃のものもあるが、8世紀末から9世紀代にかけてのものがほとんどである。奈良時代末から平安時代初めに多くみられる傾向も他の墨書土器と変わらない。

(2) 「佛」墨書土器の個別的事例

次に集落遺跡から良好な出土状況のみられた事例を主体として「佛」・「仏」墨書土器の個別の検討に移る。

① 佐原市伊地山藤之台遺跡

005竪穴建物から2個体の「佛」墨書土器が出土した。1点は土師器蓋の天井部外面に正位で書かれ、もう1点は土師器坏の体部外面に正位で書かれたものである。土師器蓋は左中央の床面から天井部を下にした状態で出土した。土師器坏はカマド右脇の床面から伏せた状態で出土したものである。他に「仁」と墨書された土師器坏がカマド内から出土している。以上の3点はほぼ完形である。「佛」・「仁」墨書の土師器坏は口縁部の一部が欠けており、意図的に打ち欠いているのかもしれない。また土師器蓋も「佛」墨書の近くで欠けているが、これも意図的な打ち欠きであるように思われる。「佛」墨書のある土師器坏の出土状況はほぼ南西ヶ作遺跡例と同様である。

② 下総町月輪神社遺跡

SI-1竪穴建物から底部外面に「門佛」と墨書された土師器坏が出土した。カマド右脇のほぼ床面からの出土である。完形品であるが、口縁部の一部を打ち欠いて、灯明器として使用している。起・伏等の状況はわからない。他に底部外面に「足人」と書かれた非ロクロの土師器坏が、カマド右袖の床面から出土している。この土器は口縁部・体部の遺存が1/4であまり良くない。しかし出土状況から「門佛」の土器とセットとなる可能性も考えられる。

第1表 千葉県出土「佛」墨書土器・関連土器集成

番号	市町村	遺跡名	釈文	種別	器種	部位・方向	時期	遺構	出土状況	備考
1	千葉市	大野第七遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀前	4B堅穴建物	覆土	
2	千葉市	西大野第一遺跡	木佛	墨書	土師器・坏	底部外面・側面	9世紀	遺構外		
3	千葉市	中鹿子第2遺跡	佛力	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀後	53堅穴建物		
4	千葉市	太田法師遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面・側面	9世紀中	093堅穴建物	床面・覆土 中央・右前	
5	市原市	萩ノ原遺跡	佛	墨書	須恵器・坏	体部外面・正	8世紀末	10堅穴建物	右奥	
6	市原市	萩ノ原遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・正	8世紀末か	15堅穴建物	カマド内	
7	市原市	萩ノ原遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・正	8世紀末か	15堅穴建物	前中央	
8	市原市	萩ノ原遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀中	18小鍛冶関係遺構		
9	市原市	萩ノ原遺跡	佛	墨書	土師器・壺	底部外面	9世紀中	一基壇	—	
10	市原市	萩ノ原遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面		遺構外	—	
11	市原市	上総国分尼寺	佛勝	墨書	土師器・坏	底部外面				
12	市川市	下総国分寺跡	九千佛	墨書	土師器・坏	底部外面・側面	9世紀後	1区SK006土坑	覆土	
13	市川市	下総国分寺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・正	9世紀前	SD601	覆土	
14	八千代市	井戸向遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀中	D088堅穴建物	下層 右奥	灯明器
15	八千代市	白幡前遺跡	佛	墨書	土師器・仏鉢	体部外面・横	8世紀末～9世紀初	D124堅穴建物	覆土 右奥	
16	八千代市	白幡前遺跡	佛	墨書	須恵器・蓋	天井部外面・横	8世紀末～9世紀初	D124堅穴建物		
17	佐倉市	江原台遺跡	佛力	墨書	土師器・高台付皿	底部外面	9世紀後	102堅穴建物	下層 中央・前中央	
18	佐倉市	江原台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・横	9世紀	23榎立柱建物		
19	佐倉市	江原台遺跡	(花模様)	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀後	H-28堅穴建物	覆土下層 中央	
20	佐倉市	南広遺跡	佛 (人面か)	墨書	土師器・坏	体部外面・側面	9世紀中	076堅穴建物	覆土 右奥	
21	佐倉市	高岡大山遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀後	95堅穴建物	覆土	
22	佐倉市	本佐倉城跡	佛	墨書	須恵器・坏	体部外面・正	9世紀中～後	遺構外	—	
23	成田市	山口遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀前	030堅穴建物	覆土	
24	成田市	輪谷・山谷遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面		4堅穴建物		
25	成田市	吉倉白ヶ峰遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・正	9世紀前	16堅穴建物	床面 左前	
26	酒々井町	尾上藤木遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	8世紀中～後	029A堅穴建物	覆土中層 右中央	
27	酒々井町	伊藤白幡A遺跡	佛力	墨書	土師器・坏	体部外面・正	9世紀中～後	100堅穴建物	覆土上層 中央	
28	酒々井町	北八幡遺跡	佛坏	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀	遺構外	—	
29	八街市	滝台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面		基壇		
30	八街市	一之綱Ⅲ遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀	堅穴建物	覆土	
31	印西市	鳴神山遺跡	佛	墨書	土師器・仏鉢	体部外面・正	9世紀前	N201堅穴建物	床面 起 前左	
32	印西市	西根遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・側面	8世紀末～9世紀初	SD012		
33	印西市	南西4作遺跡	佛 (蓮花)	墨書	土師器・坏	体部外面・正	9世紀前	036堅穴建物	床面 伏 右奥	
34	本埜村	角田台遺跡	千仏	墨書	土師器・仏鉢	体部外面・側面	9世紀前～中	388堅穴建物	床面 伏 左奥	35・36と三枚重ね
35	本埜村	角田台遺跡	鉢	墨書	土師器・仏鉢	体部外面・正	9世紀前～中	388堅穴建物	床面 伏 左奥	34・36と三枚重ね
36	本埜村	角田台遺跡	鉢	墨書	土師器・坏	体部外面・正	9世紀前～中	388堅穴建物	床面 伏 左奥	34・35と三枚重ね
37	本埜村	角田台遺跡	佛	墨書	土師器・高台付坏	体部外面・横	9世紀前～中	239堅穴建物	覆土 横 右中央	
38	本埜村	角田台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・側面	9世紀前～中	391堅穴建物	覆土 右奥	
39	佐原市	伊地山麓之台遺跡	佛	墨書	土師器・蓋	天井部外面・正	8世紀末	005堅穴建物	床面 伏か 左中央	
40	佐原市	伊地山麓之台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・正	8世紀末	005堅穴建物	床面 伏 右奥	
41	下総町	月輪神社遺跡	門佛	墨書	土師器・坏	底部外面	8世紀末	SI-1堅穴建物	床面 右奥	灯明器
42	大栄町	村田居山遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀中～後	SI10堅穴建物		
43	小見川町	織幡妙見堂遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・正	9世紀前～中	SI-16堅穴建物	覆土	
44	多古町	上持台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・正	9世紀前～中	25堅穴建物	覆土 右前	
45	多古町	中内原遺跡	佛	墨書	不明	不明	不明	不明		
46	八日市場市	柳台遺跡	千俣 (仏カ)	墨書	仏鉢形土器	体部外面・正	9世紀中	121堅穴建物		
47	山武町	鷲山入遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・正	9世紀前～中	H-006堅穴建物	カマド内	
48	東金市	滝東台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・横	9世紀前	119堅穴建物	床面	
49	大網白里町	砂田中台遺跡	盛佛	墨書	土師器・坏	底部外面	8世紀後	024堅穴建物	左中央	
50	大網白里町	砂田中台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・横	9世紀中	090堅穴建物	中央	
51	大網白里町	砂田中台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・横	9世紀中	100B堅穴建物	覆土 横 左奥	52・53と三枚重ね
52	大網白里町	砂田中台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・横	9世紀中	100B堅穴建物	覆土 横 左奥	51・53と三枚重ね
53	大網白里町	砂田中台遺跡	法・ササ	墨書	土師器・坏	体部外面・横	9世紀中	100B堅穴建物	覆土 横 左奥	51・52と三枚重ね
54	大網白里町	砂田中台遺跡	佛	墨書	土師器・坏	体部外面・正	9世紀前	109堅穴建物	前中央	
55	成東町	真行寺庵寺跡	仏工舎・小	墨書	土師器・坏	底部外面	8世紀後～9世紀前	鍛冶工房	覆土中層 中央	
56	芝山町	庄作遺跡	井 (井)	墨書	土師器・坏	体部外面・側面	9世紀前	68堅穴建物		
57	袖ヶ浦市	西寺原遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀前～中	110堅穴建物	覆土	
58	袖ヶ浦市	西寺原遺跡	佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀前～中	110堅穴建物	覆土	
59	袖ヶ浦市	東郷台遺跡	四佛	墨書	土師器・坏	底部外面	9世紀前	7溝	覆土	

③ 八千代市井戸向遺跡

D088堅穴建物のカマド右脇の床面近くから重なった2点の土器が、口縁部を上向き加減にした斜めの状態で出土した。内側の土器は底部外面に「佛」と墨書された完形の土師器坏で、口縁部全体にタール状の付着物がみられた。灯明器として使用されたことがわかる。やや小型の土器なので灯明専用として作られたのだろうか。外側の土器は須恵器坏で、底部中央に焼成後の穿孔がみられた。また、口縁部も一部欠けているがこれも意図的なものかもしれない。この2点がセットであることは明白であるが、灯明器としてのセットで

あるのか、平常は単独に使用されていた土師器坏のみの灯明器が、最終的な祭祀行為により底部中央に穿孔した須恵器坏とセットになったものかは検討を要する。

やや離れてカマド寄りのほぼ床面から出土した小型の須恵器壺も口縁部以外は遺存しており、3個体のセットとなることも考えられる。

他に「富」等の墨書土器が出土しているが、関連があるかどうか出土状況からはわからない。

④ 大網白里町砂田中台遺跡

100B堅穴建物の左奥の壁際から土師器坏が3枚重ねで出土した。3個体とも墨書されており、うち2個

体は「佛」が体部外面に横位で書かれている。もう1個体は「法」の上に「ササ」の文字が上書きされた土器である。「ササ」は菩薩を意味する仏教語とのことであり、仏教的な色彩の濃厚な遺物群である。高さの記録はないが、写真図版から見る限りでは覆土中位の出土で、口縁部を上を斜めに傾いた状況で出土している。出土状況からは本来の場所にあったものとは思われない。100B 堅穴建物居住者が使用していたとも断定できないが、3個体がセットで使用されたことは確実である。

砂田中台遺跡では他の堅穴建物でも「佛」を含む墨書土器が出土している。

024 堅穴建物では非ロクロの土師器坏の底部外面に「盛佛」と書かれた土器が出土している。左中央壁際の出土であるが、高さと共に起・伏等の区別がわからない。

090 堅穴建物からも土師器坏の体部外面に横位で「佛」と書かれた土器が出土している。堅穴建物中央からの出土であるが、高さ等はわからない。

109 堅穴建物からも土師器坏の体部内面に正位で「佛」と書かれた土器が出土しているが、小片である。

⑤ 山武町鷲山入遺跡

H-006 堅穴建物から体部外面に「佛」と墨書された土師器坏が出土した。カマド内からの出土である。遺存は写真図版からは60%程度か。完形ではない。起・伏等の状況はわからない。カマド内からは須恵器香炉形土器も出土した。他に中央部ややカマド寄り床面から体部外面に横位で「徳」と墨書された土師器坏が出土した。

H-006 堅穴建物のすぐ近くには3間×4間で片庇の付いた掘立柱建物がある。内部に土坑があり、そこから出土した土師器坏の底部内面には「寺」のヘラ書きがみられる。

また、近隣のH-026 堅穴状遺構からは、体部外面に正位で「山宝寺」と墨書された土師器坏が出土した。

このような状況から、以上の遺構群は山宝寺と呼ばれた仏堂及びそれに関連する堅穴建物群と理解できる。

⑥ 市原市萩ノ原遺跡

2基の基壇があり、比較的格の高い寺跡を含む遺跡である。10号 堅穴建物は長方形の特異なプランであるが、右奥の位置から体部外面に正位で「佛」と墨書された須恵器坏が出土した。垂直位置と共に起・伏等の状況はわからないが、この土器と堅穴建物の形状から基壇建物と密接に関連する建物と想定される。

15号 堅穴建物でも「佛」と墨書された土器が2個体出土した。ともに非ロクロの土師器坏で、体部外面に

正位で記されている。1個体は完形で、カマド左袖部の下から出土したと報告されている。カマドの構築あるいは廃絶儀礼に関わる土器であろうか。もう1個体は中央ややカマド寄りの位置から出土した。垂直位置及び起・伏等の状況はわからない。

なお1号基壇からは、底部外面に「佛」と墨書された土師器坏が出土しているが、この土器は寺院建立の際の埋納儀礼に関わるものである。

⑦ 佐倉市南広遺跡

076 堅穴建物から出土した土師器坏は「佛」墨書が2カ所、底部外面と体部外面・倒位で記入されている。さらに報告では墨画と推測されている墨書が体部に描かれている。この部分で欠けているが、意図的な打ち欠きかもしれない。建物の右奥の位置で出土しているが、床面からかなり高い位置である。棚から落下したというような状況を想定しない限り、076 居住者が残したものと断定しがたい。

⑧ 芝山町庄作遺跡

68 堅穴建物では、体部外面に倒位で「佛酒」、底部外面に「井」（または「井」）と墨書された完形の土師器坏が出土しているが、詳細な出土状況はすべて不明である。

⑨ 印西市鳴神山遺跡

N201 堅穴建物から体部外面・正位に達筆な字体で「佛」と書かれた仏鉢形土器が出土した。左前の床面から底部を下に据え置いたような状態での出土である。

N201 は集落の中心部から離れた調査区北端に位置し、周囲に同時期の遺構もみられない。堅穴建物ももっとも小型の部類であり、カマドの様相から存続期間も短かったものと推定されている。以上の様相から報告書では僧侶の住居と考察されている。仏鉢形土器は僧侶が遺棄していったものと考えられよう。

⑩ 本埜村角田台遺跡

388 堅穴建物の左奥床面から伏せた3枚重ねの土器群が出土した。一番下が土師器坏で、「林」の線刻が体部外面と内面にともに正位で刻まれている。線刻は内面が黒色処理されていることによるのであろう。その上に2点の仏鉢形土器がある。中位の土器は「鉢」が体部外面に正位で、「佗」が対向する位置に横位で記されている。上位の土器は「千仏」が体部外面に倒位で、ほぼ90度の位置に「妙」が横位で記され、「妙」と一部が重なって線刻もある¹²⁾。

「千仏」と「林」の土器は口縁部がわずかに欠けており、意図的に打ち欠いた可能性が考えられる。「鉢」の

土器も復元により完形となったが、破損状態から口縁部を打ち欠いているように思われる。口縁部の打ち欠きは自然な破損との区別が難しいが、出土状況より意図的な行為の可能性が高いと考える。また、器面の状態から3個体とも若干の火熱を受けているように思われる。

この堅穴建物からは灯明器として使用されたと思われる土師器杯が2点出土した。1点は3枚重ねの土器群近くのカマド左脇覆土中からの出土で、もう1点は前中央部の床面・覆土下層からの出土である。周囲に奈良・平安時代の堅穴建物が存在するが、数は多くない。

388堅穴建物の80m北側に所在する391堅穴建物からも「佛」の墨書土器が出土しているが、覆土中からの出土である。391堅穴建物の近くに所在する390堅穴建物からは香炉蓋が出土しており、堅穴建物の数は少ないものの仏教系遺物の出土が目立つ。388の出土遺物も通常の集落構成員の住居とするには仏教的な色彩が強すぎ、僧侶の住まいである可能性が考えられる。

239堅穴建物からも「佛」の墨書土器が出土している。堅穴建物の右中央部で、覆土中から横位での出土である。土器は土師器高台付杯であるが、やや手づくね土器風の祭祀的な土器である。

角台遺跡では奈良・平安時代の堅穴建物群が、南側から延びる支谷をはさんで東西の台地に分布している。分布は全体に濃密とはいえないが、東側の方が密度が濃く、西側が薄い。239は東側台地に所在する。388及び391は西側台地に所在するため、239とはやや離れている。

⑪ 八千代市白幡前遺跡

八千代市萱田地区に所在し、井戸向遺跡と近接する遺跡である。D124堅穴建物の右奥、床面近くから2枚重ねの土器群が出土した。1点は体部外面に横位で「佛」と墨書された仏鉢形土器で、底部を下にやや傾いて出土した。もう1点は天井部外面に「佛」と墨書された須恵器蓋で、仏鉢形土器の中に天井部を上にして納めたような形で密着して出土した。仏鉢形土器の中には食物等何らかの内容物があってその上に蓋をしたものの、内容物の腐朽に伴い、蓋が落下したと考えることは、可能性としてはあり得るだろう。しかし、口径が合わないため、通常の状態での蓋・身のセット関係を考えることは困難である。内容物の有無はさておき、祭祀的な意味でのセット関係となる土器群と思われる。

D124からは瓦塔片や土師器香炉の脚部も出土しており、仏教系遺物の出土が目立つ。

D124の近くには、同時期の掘立柱建物が存在する。この建物は身舎部分が3間×2間の四面庇建物であり、仏堂と把握できる。D124は仏堂関係の堅穴建物と理解される。

⑫ 小見川町織畑妙見堂遺跡

白幡前遺跡と似た状況は、小見川町織畑妙見堂遺跡からもうかがえる。SI-16堅穴建物では、仏鉢形土器と、「佛」の墨書が底部外面と体部外面に正位で書かれた土師器杯が出土した。近くに四面庇の掘立柱建物が存在することから、この堅穴建物も仏堂に関係する遺構であったと考えられる。

(3) 花模様のある遺物について

花模様のある墨画土器については、佐倉市江原台遺跡に類例がある。底部外面に花模様の墨画が描かれた土師器杯で、H-28建物から出土した。他に文字・記号はみられないが、口縁・体部が欠けているので、その部分に存在した可能性も考えられる。堅穴建物の中央部のやや右隅寄りのところで覆土下層から出土した。花卉先端は南西ケ作例が細くなっているのに対し、丸まっている。また南西ケ作例が底部外面に大きく描かれているのに対し、江原台例は小さく描かれている。江原台例が蓮の花である確証はないが、蓮の花とするならば南西ケ作例よりも退化した印象を受ける。進化的にいえるかどうかかわからないが、出土遺物の様相から堅穴建物の時期をみると、南西ケ作036は9世紀初め頃、江原台H-28は9世紀後半と思われる、江原台遺跡の方が新しい。江原台遺跡からは「佛」墨書土器も出土しているが、花模様の土器が出土した堅穴建物とはかなり離れている。

千葉県内での花模様の墨画土器は、筆者の管見にふれた限りではこの2例のみで、非常に類例の少ないものである。県外に目を転じると、埼玉県熊谷市北島遺跡第14地点第46号住居跡から花模様を線刻した紡錘車が出土している¹³⁾。紡錘車の全面に花模様が描かれているが、広い面に刻まれた花模様は明らかに蓮の花と報告されている。一方、狭い面に刻まれた花模様は蓮の花とは断定されていない。また出土した堅穴建物には他に仏教的な遺物はみられない。この紡錘車については機織り祭祀との関連も考えられようが、蓮の花模様については仏教的な色彩を重視されている。南西ケ作例とあわせて奈良・平安時代に蓮花を表現する仏教的思

潮が広域に存在したことを示す資料として興味深い。

5. 「佛」墨書土器の検討

前項で「佛」墨書土器についての個別の事例をみたが、土師器坏に関しては、出土位置が竪穴建物の右奥、向かってカマド右脇に多いことに気付く。そのうち、南西ケ作遺跡例と伊地山藤之台遺跡例はともに右奥の床面に伏せた状態で出土し、よく似た状況である。竪穴建物の廃絶にあたって、居住者が床面に伏せたまま遺棄していった状態を示している。

この状態に対して、「佛」という墨書土器を使用する祭祀行為に伴って、意図的に伏せたと解釈することも一案である。

しかし、そのように考えるには事例が少なすぎ、また墨書の有無にかかわらず、カマド周辺の土器の出土状況を検討しなければならないだろう。今回「佛」墨書土器を集成してたまたま目にした事例であるが、山武町鷲山入遺跡H006竪穴建物では、墨書されていない完形の土師器坏がカマド右脇の床面から伏せた状態で出土した¹⁴⁾。奈良・平安時代の竪穴建物には貯蔵穴の設置があまりみられないが、古墳時代後期にはカマド脇床面が貯蔵穴の設置場所であることがまれではなかった。奈良・平安時代になっても、カマド脇の空間が土器などの保管スペースであり、床面に伏せてあるいは底部を下にしたそのままの状態に置いたことが十分に考えられる。

したがって、南西ケ作例も伊地山藤之台例も通常の土器保管状態を示しているとも考えられる。しかし、「佛」墨書土器以外の土器の出土状況について筆者の検討が不十分であるので、この件については今後の課題としたい。

しかし、角田台遺跡388竪穴建物出土の3枚重ねの土器群は、伏せるという行為に明らかに祭祀的意味合いのある事例と考えられる。また、中位・上位の仏鉢形土器2点を比較すると、「千仏」の土器を「鉢」の土器の上位に重ねることを意図したように思われる。

ただし、388竪穴建物の場合、仏鉢形土器という仏器専用器を使用しており、遺跡のあり方から僧侶あるいは優婆塞・優婆夷等の修行場的な雰囲気も感じられる。

仏鉢形土器については各事例で出土状況が異なっているが、取り上げた事例だけでは少なすぎ、墨書されていないものも含めて検討しなければならないだろう。

仏鉢形土器を含まない土器群での伏せる祭祀行為としては、「佛」墨書から離れるが、佐原市馬場遺跡の事

例が著名である¹⁵⁾。

これは馬場遺跡004竪穴建物のカマド火床部から4点の土師器坏が伏せて重なった状態で出土したという事例であるが、最上位の坏には体部外面に倒位で「上」と墨書されていた。この「上」の土器ともう1点の土器は灯明器として使用されており、最終的な廃棄以前から祭祀的な様相をうかがえる。この土器群はカマドの廃絶儀礼に関わるものと想定されている¹⁶⁾。

大栄町村田居山遺跡の事例も伏せる祭祀行為と考えられる¹⁷⁾。SI9竪穴建物のカマド火床部から土師器坏が伏せた状態で出土した。そしてこの土器の内面には「鬼守総□磨」という注目すべき墨書文字が記入されていた。カマド内ではこの土器の近くから他に4点の土師器坏が出土した。そのうち、2点は図からは伏せて重なっているように見える。また4点のうち、2点はかなり遺存が良く、そのうち1点は灯明器である。このような出土状況からこれらの土器群はセットとなる可能性が考えられる。墨書内容からも何らかの祭祀行為に関わる土器と理解できる。

土器を伏せる祭祀行為については、この他にも阿久津久氏によって、茨城県三和町浜ノ台遺跡や栃木県小山市金山遺跡の事例がカマド祭祀に伴う行為として指摘されており、特殊とはいえない様相をうかがえる¹⁸⁾。

角田台遺跡388竪穴建物の事例は伏せる行為であると同時に複数個体を重ねる祭祀行為でもある。

土器を重ねる行為も単なる保管上の場合もあり得るので、出土状況を慎重に見極めなければならないが、砂田中台遺跡100B竪穴建物出土の3枚重ねの土師器坏は墨書内容から祭祀行為に伴うセットの土器群と考えられよう。

同様に、井戸向遺跡D088竪穴建物から出土した灯明用土師器坏と底部穿孔須恵器坏、白幡前遺跡D124竪穴建物から出土した仏鉢形土器と須恵器蓋も各々祭祀行為に伴うセットの土器群と理解できよう。

重なってはいないが、複数個体のセット関係と思われる事例が他にもある。

茨城県牛久市ヤツノ上遺跡4号竪穴建物から出土した3点の土師器杯はいずれも墨書があり、各々体部外面に正位で「佛」、体部外面に横位で「阿弥厨」、底部外面に「大生□」と書かれている¹⁹⁾。これら3点の土師器杯は左前の覆土下層（床面としてよいかもしい）から近接して正位の状態に出土しており、出土状況からセットとなる可能性が考えられる。遺物群の年代は9世紀前葉と思われる。

千葉県内の「佛」墨書土器については、底部を下にそのまま床面に置いた出土状況のわかる事例が少ない²⁰⁾。

鳴神山遺跡N201竪穴建物から出土した仏鉢形土器は明らかに床面に置かれていたが、土師器坏等の事例が不明瞭である。しかし、ヤツノ上遺跡の事例から、今後千葉県内でも正位に出土する例はみられるであろう。

井戸向遺跡D088竪穴建物から出土した底部穿孔の須恵器坏から、祭祀にあたって破壊するという行為もあったことがわかる。

「佛」墨書土器そのものを破壊した例としては、南広遺跡076竪穴建物から出土した土師器坏にその可能性がある。この土器は「佛」の他に墨画と推測されている墨書があり、その部分を壊していると思われるものである。

茨城県つくば市明石遺跡139号竪穴建物から出土した土器も破壊事例の一つと指摘されている²¹⁾。この竪穴建物のカマド内を主体として、非ロクロの土師器坏1点、須恵器坏3点、須恵器高台付坏1点、計5点の土器が出土した。これらの土器群は完形品を含む遺存度が80%以上の土器群である。このうち、非ロクロの土師器坏は底部外面に「佛」と墨書された土器であるが、火床面から割れた状態で出土した。また底部外面に「光」と墨書された須恵器杯も火床面及び前面の床面から割れた状態で出土している。この2点の墨書土器は意図的に破壊されたものと思われる。

なお須恵器坏3点のうち2点は墨書がないが、このうち1点がカマド内及び出入り口ピット際で出土した。出入り口ピット左脇の床面からは、底部外面に「光」と墨書された非ロクロの土師器坏が正位で出土している。この土器は遺存度が60%であるが、両者とも破壊され、意図的にカマドと出入り口部に置かれた可能性も考えられよう。

以上の土器群のうち、少なくともカマド内の2点の墨書土器はセットであり、報告書で述べられているように、何らかの祭祀行為に使用されたものと思われる。それら以外の土器もセットに加わる可能性が考えられる。土器群の年代は8世紀後葉と思われる。

墨書土器の破壊については、栗田則久氏が佐原市吉原山王遺跡の報告書中において、複数の長文墨書土器が同じ文字のところで欠損していることから、意図的な破壊であることを指摘している²²⁾。

同様に山口耕一氏も栃木県河内郡上三川町多功南原

遺跡の報告書中で、墨書土器の破損状況から文字部分で割っている可能性を言及している²³⁾。

以上みてきたように祭祀行為にあたって墨書土器及びセットの土器が破壊される場合があるが、その一方で破壊されない墨書土器が数多く存在する。どのような場合に破壊されるのか、今後の検討課題である。

破壊といっても、完全に破壊した場合には、単に割れて廃棄した場合と出土状況のうえで区別することがかなり難しいように思われる。出土状況への注意が必要となろう。また、灯明器に使用された場合などで、口縁部を打ち欠くことがしばしばみられる。その破損行為のなかには灯明使用に属する行為の場合もある。

なお、伏せた土器も、底部を下にそのまま置いた土器も、カマド内から出土した土器も調査で目にするのは、土器の最終的な姿である。「佛」墨書土器の中にも灯明器として使用された土器があり、それらの土器がもし伏せた状態で出土したとしても、それ以前にずっと伏せていたのではないことは明白である。

6. まとめ

「佛」墨書土器を通して見た墨書土器を使用する祭祀行為について出土状況を中心にまとめてみる。以下、気付いた点をアットランダムに箇条書きとする。

- ・単独の墨書土器を使用する場合
- ・複数の土器を使用する場合
- ・複数の土器を使用する場合、すべてが墨書土器で占められる場合
- ・複数土器の一部に墨書されていない土器を含む場合
- ・土器を伏せる場合
- ・土器を底部を下にしてそのまま置く場合
- ・土器を重ねる場合
- ・複数土器のセットではあるが重ねない場合
- ・土器を破壊しない場合
- ・土器を破壊する場合
- ・土器を破壊する場合、一部の破壊の場合
- ・土器を破壊する場合、完全に破壊する場合
- ・破壊しない土器と破壊された土器がセットとなっている場合

以上のようなことがらが考えられる。伏せて重ねるなど以上の事象が複合する場合もある。なお、土器を完全に破壊する場合については、良好な出土状況の蓄積が必要であると思われる。また、墨書土器に加えて食物など有機物の材料が存在した場合があったと思われるが、考古学的にはその証明がかなり難しい。

上記の記述は最終的な墨書土器の出土状況がなんらかの祭祀行為を反映しているとした場合の記述である。長い年月の間に原位置を留めていない場合も当然ながらあったことと思われる。

また墨書を記入することのみに意味があり、具体的な祭祀行為は特に行われなかったことも考えられる。そのような場合は、最終的な出土に特に痕跡は残らないこととなる。あるいはたびたびの祭祀行為に墨書土器が使用されたが、使用のさいに破損したため窪地等に廃棄したこともあり得よう。むしろ、そのような場合の方が多いのかもしれない。

しかし、墨書土器を使用する何らかの祭祀行為が現在に至るまで痕跡を留めている場合があることも確かである。

蓄積された研究成果により、東国の集落出土の墨書は主として延命祈願や招福除災を願って記入されることが明らかになってきた²⁴⁾。佐原市馬場遺跡の伏せて重ねた土器器群もそのような事例の一つであり、栗田則久氏は「竈神的な存在を永久に封じ込める」ために土器を伏せたと解釈されている²⁵⁾。伏せた「佛」墨書土器がカマド神と関わるかどうかは出土状況によるのだろうが、一般的に伏せる行為は自身に取り付いた穢れや罪を除去し、封じ込めることを目的としたと考えられる。封じ込めることを想定して、「佛」や「神」等、呪力の高い文言が記されたのであろう。

それでは、そのような呪力の高い文言や記号を記した墨書土器を使用する祭祀をいつ行ったのであろうか。一つは先に述べたように竪穴建物廃絶時と考えられる。新家屋に旧家屋が宿していた穢れを引き継がないよう封じ込めたと考えたい。

しかし、祭祀行為は竪穴建物廃絶時だけではないであろう。近年、平川南氏の研究成果により、長文墨書土器に対する理解が定まってきた²⁶⁾。病気快癒等を願い、随時発願され、祭祀行為が行われたと考える。また、祓いの行事等、年中行事的なものもあったのではないと思われる。

破壊する行為についてはどうであろうか。一つには日常的な器ではないことを明示する手段と考えられる。しかし、墨書土器に関してはそれだけではないように思われる。

穢れを封じ込めることは、その穢れが自分に入り込まない、あるいは自分から離れて再度自分自身の内に入り込まないことを意味する。そうであるならば、土器そのものに穢れを取り憑かせたとも理解できる。そ

してその土器を破壊することで、自身の穢れが雲散霧消することを意図したものと思われる。

しかし、もしそのように考えられるとしても、封じ込める行為と破壊する行為の違いがどこにあるのだろうか。どのような場合に封じ込め、どのような場合に破壊するのかが判然としない。今回の検討では事例が少なく、筆者の墨書土器や当該時代に対する理解も浅いため、他日を期すこととしてひとまず稿を終えることとする。

最後になりましたが、角田台遺跡の出土文字資料に関してご教示いただいた国立歴史民俗博物館の平川南氏にお礼申し上げます。また、八千代市教育委員会の蕨茂美氏・森竜哉氏・武藤健一氏には、資料の実見に際して、大変お世話になりました。ここに記してお礼申し上げます。さらに実測で助力いただいた林良子氏をはじめ、日頃から筆者の戯言にお付き合いいただいている印西調査室・北総調査室の内勤補助員の皆様方にもお礼申し上げます。

注

- 1) 高木博彦他 1974 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』(財)千葉県都市公社
- 2) 『千葉県文化財センター年報』No26 2001
- 3) 西根遺跡は現在、千葉県文化財センターで整理作業中である。墨書土器については小林信一氏からご教示をいただいた。
- 4) 鳴田浩司他 1999 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』(財)千葉県文化財センター
萩原恭一他 2000 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』(財)千葉県文化財センター
- 5) 注1文献
1995年～1997年に再度発掘調査が実施され、現在、千葉県文化財センターで整理作業を実施中である。
- 6) 佐藤克巳他 1974 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』(財)千葉県都市公社
今泉潔 1990 「「瓦と建物の相剋」試論—大塚前遺跡出土瓦の分析—」『千葉県文化財センター研究紀要』12
- 7) 同上今泉文献1990及び
糸原清他 1997 『千葉県文化財センター研究紀要』18
- 8) 現在、千葉県文化財センターで整理作業を実施中。
- 9) 武藤健一 2001 『千葉県八千代市上谷遺跡 第1分冊』八千代市遺跡調査会
- 10) 田形孝一氏のご教示による。
- 11) 遺構数は正式報告時で訂正される可能性がある。
- 12) 「佗」と「妙」の釈読は平川南氏のご教示による。
- 13) 鈴木孝之他 1998 『熊谷市 北島遺跡Ⅳ』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 14) 第1表文献47に同じ
- 15) 栗田則久他 1988 「馬場遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ(佐原地区1)』(財)千葉県文化財センター
- 16) 注15文献及び
平川南 2000 「墨書土器と古代集落—千葉県八千代市村

上込の内遺跡-』『墨書土器の研究』吉川弘文館

高島英之 2000 「古代東国の村落と文字」『古代出土文字資料の研究』東京堂出版 等

17) 第1表文献42に同じ

18) 阿久津久 1994 「カマドにみる祭祀の一形態」『日立史苑』7 日立市史編さん委員会

19) 小高五十二 1993 『牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(I) ヤツノ上遺跡』(財)茨城県教育財団

20) これは本来わからなかったという意味ではない。今回「佛」墨書土器の集成表を作成して、出土状況のわからない事例が多いことにやや失望の思いを抑えることができなかった。平面位置・垂直位置ともに報告されていないもの、垂直位置が報告されていないもの、平面位置・垂直位置ともに報告されているが、土器そのものの出土状況が報告されていないものといった状況である。3番目の場合は遺存の悪い個体や覆土中であれば、あまり意味がない場合も多いだろう。しかし、遺存の良い個体が床面または覆土下層から出土している場合は、居住者が意図的に遺棄していった可能性が高いので、底部を下にして出土したのか、伏せたのか、そのどちらでもないのか、重ねているか等の記録が必要である。出土状況の記録は後で検証できる事項に比べ、調査・整理担当者が記録・報告しなければ、他の誰も知ることのできなくなる可能性が高い。その重要性についてはすでに栗田則久氏が注15文献等で指摘しているが、現状では十分に生かされているとは思えない。整理作業の時間不足という問題もあるが、せめて記述だけでもあればと感じた。今後の良好な調査・報告例を期待したい。

もっとも、以上述べたことを筆者自身が十分にできているわけではない。他者を批判することなどおこがましいが、自分自身を含めての批判ということでご容赦いただきたい。

21) 大関武他 2000 『主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 明石遺跡 明石北原遺跡 上白畑遺跡』(財)茨城県教育財団

22) 栗田則久他 1990 『佐原市吉原三王遺跡-東関東自動車埋蔵文化財調査報告書V(佐原地区2)-』(財)千葉県文化財センター

23) 山口耕一 1999 『多功南原遺跡』(財)栃木県文化振興事業団

24) 注16平川 2000, 高島 2000 文献等

25) 注15に同じ

26) 平川南 2000 「古代人の死、と墨書土器」『墨書土器の研究』吉川弘文館

第1表記載遺跡引用文献

1・2. 西口徹1994『土気緑の森工業団地内発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター 3. 菊池健一他1992『千葉中央ゴルフ場遺跡群発掘調査報告書』(財)千葉市文化財調査協会 4. 森本和男2001『千葉東南部ニュータウン23-千葉市太田法師遺跡2-』(財)千葉県文化財センター 5~10. 田口崇他1977『千葉県萩ノ原遺跡発掘調査報告』日本文化財研究所 11. 宮

本敬一1994「上総国分寺の成立-尼寺の造営過程を中心として-」『第8回企画展 東海道の国分寺-その成立と変遷-』栃木県教育委員会 12. 山路直充他1994『下総国分寺跡 平成元~5年度発掘調査報告書』市川市教育委員会 13. 山路直充1986『下総国分尼寺跡IV 昭和60年度調査報告』市立市川考古博物館 14. 藤岡孝司他1987『八千代市井戸向遺跡』(財)千葉県文化財センター 15・16. 大野康男他1991『八千代市白幡前遺跡』(財)千葉県文化財センター 17. 高橋健一他1979『江原台』江原台第1遺跡発掘調査団 18. 高田博他1980『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書II』(財)千葉県文化財センター 19. 高田博他1977『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書I-第1次・第2次調査-』(財)千葉県文化財センター 20. 金丸誠他1993『佐倉市南広遺跡』(財)千葉県文化財センター 21. 阿部寿彦他1993『千葉県佐倉市高岡遺跡群III』(財)印旛郡市文化財センター 22. 進藤泰裕他1995『千葉県印旛郡酒々井町 本佐倉城跡発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター 23. 天野努他1981『公津原II』(財)千葉県文化財センター 24. 工藤英行1978『山谷遺跡発掘調査概要』『成田史談』第23号 成田市文化財保護協会 25. 喜多裕明『千葉県成田市 川栗遺跡群III』(財)印旛郡市文化財センター 26. 木内達彦他1988『千葉県印旛郡酒々井町 下台遺跡・藤木遺跡A・B地区発掘調査報告書』(財)印旛郡市文化財センター 27. 三浦和信他1986『酒々井町伊篠白幡遺跡』(財)千葉県文化財センター 28. 香取正彦他1996『一般国道296号国道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書1-酒々井町本佐倉北大堀遺跡-』(財)千葉県文化財センター 29. 高木博彦1979『墨書土器よりみたる房総古代仏教の一側面』『MUSEUM ちば』第10号 千葉県博物館協会 30. 『平成5年度 財団法人 印旛郡市文化財センター年報』10 1994 31. 田形孝一他1999『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書II-印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡-』(財)千葉県文化財センター 32. 『千葉県文化財センター年報』No26 2001 現在千葉県文化財センターで整理中 34~36. 猪俣昭善・谷匂1996『本埜村角田台遺跡出土の文字資料』『研究連絡誌』第46号 (財)千葉県文化財センター 現在千葉県文化財センターで整理中 39・40. 太田文雄他1990『大栗栗源干潟埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター 41. 平野功1996『月輪神社遺跡』(財)香取郡市文化財センター 42. 黒沢哲郎他1997『村田居山遺跡』(財)香取郡市文化財センター 43. 平野功1994『織幡妙見堂遺跡II』(財)香取郡市文化財センター 44. 三浦和信他1986『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書-林小原子台・栗根・土持台・林中ノ台・吹入台-』(財)千葉県文化財センター 45. 勝又貫行1988『中内原遺跡』多古町教育委員会 46. 福間元他1986『飯塚遺跡群発掘調査報告書 第3分冊』八日市場市教育委員会 47. 山口直人他1999『鷲山入遺跡』(財)山武郡市文化財センター 48. 椎名信也他1995『油井古塚原遺跡群』(財)山武郡市文化財センター 49~54. 平山誠一他1994『砂田中台遺跡(奈良・平安時代篇)』(財)山武郡市文化財センター 55. 谷川章雄他1985『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告-鍛冶工房址の調査-』成東町教育委員会 56. 松田政基他1990『小原子遺跡群調査報告書』山武考古学研究所 57・58. 豊巻幸正他1985『千葉県袖ヶ浦町 永吉台遺跡群』(財)君津郡市文化財センター 59. 光江章1986『-千葉県袖ヶ浦町-東郷台遺跡(川原井廃寺)』(財)君津郡市文化財センター